

## 洋12-137

### 「故郷よ」 ★★★

2012（平成24）年12月25日鑑

賞<角川映画試写室>

監督：ミハル・ボガニル

アーニヤ（原発事故当時の花嫁、ツアーガイドとして故郷に留まる）／オルガ・キュレリンコ

アレクセイ（原子力発電所の技師）／アンジェイ・ヒラ

16歳のヴァレリー（アレクセイの息子）／イリヤ・イオシフォフ

ディミトリ（ピョートルの友人、“石棺”で働く）／セルゲイ・ストレルニコフ

ニコライ（森林警備員）／ヴァチェスラフ・スランコ

パトリック（10年後のアーニヤの婚約者）／ニコラ・ヴァンズィッキ

ピョートル（アーニヤの新郎、消防士）／ニキータ・エムシャノフ

アーニヤの母／タチアナ・ラッスカゾファ

2011年・フランス、ウクライナ、ポーランド、ドイツ映画・108分

配給／彩プロ

#### <やっぱり、ドキュメンタリーよりフィクションの方が>

2011年3月11日に発生した東日本大震災をめぐっては多くのドキュメンタリー映画が作られたが、その手のドキュメンタリー映画があまり好きではない私はそれらをほとんど観ていない。観たのは「炎のマエストロ」と呼ばれる指揮者コバケンこと小林研一郎とその仲間たちオーケストラを追ったドキュメンタリー『天心の譜』（12年）だけだ。しかし、東日本大震災をテーマにしたフィクションものは、園子温監督の『ヒミズ』（12年）（『シネマルーム28』210頁参照）と『希望の国』（12年）（『シネマルーム29』37頁参照）を、そしてまた私の注目する美人女優・杉野希妃がプロデュース兼主演した『おだやかな日常』（12年）を鑑賞し、感銘を受けた。

同じように1986年4月26日にソビエト連邦（現ウクライナ）のプリピャチで発生した「チェルノブイリ原発事故」についてもたくさんのドキュメンタリー映画が作られてきたが、私はそれらにはあまり関心を示さず、今回は1973年にイスラエルで生まれた女流監督ミハル・ボガニルの長編劇映画初監督となる本作を鑑賞。本作は、チェルノブイリ原発事故をテーマとしたフィクション映画だが、私はやっぱりドキュメンタリー映画よりフィクション映画が好き。

#### <あつと驚き！あの美しすぎる女優がヒロインに！>

本作は予告編を2度観たが、そこでは純白のウエディングドレスを着た美しい花嫁が印象に残った。そこで調べてみると、その女優は何と『007』シリーズ22作目の『007/慰めの報酬』（08年）でボンドガール、というよりジェームズ・ボンドと共に戦う戦友のような謎の美女カミーユを演じた女優オルガ・キュレリンコだ（『シネマルーム22』88頁参照）。1979年にウクライナで生まれた彼女は本作への出演を監督に強烈に直訴したものの、ミハル・ボガニル監督は「美しすぎる」との理由で当初躊躇したらしい。そんなハンディキャップ(?)にもかかわらず、彼女はその後のオーディションで立派に本作のアーニヤの役を射止めたそうだから立派なものだ。

結婚式のやり方は世界各地いろいろだが、ミハル・ボガニル監督は長編映画初挑戦ながら映画冒頭、チェルノブイリ原子力発電所のあるソビエト連邦（現ウクライナ）の町プリピャチにおける音楽と友人たちの祝福に満ちあふれた楽しそうな結婚式と、その最中の4月26日に起きたチェルノブイリ原発の爆発事故を見事に対比させていく。「原子爆弾」と「黒い雨」は、1945年8月6日のヒロシマへの原子爆弾投下によって日本人には強烈な印象として残っているが、本作前半で盛んに降る雨はそれを不気味に予告していく。誇らしげに立つレーニン像の前での新郎新婦たちの記念撮影が急な雨に見舞われてしまうのはご愛敬だが、野外のテーブルの上に盛られた料理や真っ白のテーブルクロスが黒い雨にたたかれていく情景を観ていると、思わずゾッ・・・。

#### <異変の中、町の人々は？>

大量に降り始めた雨による異変に最初に気づいたのは、森林警備員のニコライ（ヴァチェスラフ・スランコ）。戦車が行き来し、軍の手によって道路が閉鎖されているのは一体なぜ？また、原子力発電所技師であるアレクセイ（アンジェイ・ヒラ）のもとに入った1本の電話によって原発事故の重大さに気づいたアレクセイは、ただちに妻と息子のヴァレリー（イリヤ・イオシフォフ）を避難させたが、その後の自らの行動とは？

他方、結婚式を新婦のアーニヤと共に楽しんでいたはずの消防士の新郎ピョートル（ニキータ・エムシャノフ）に対しては、ただちに原発事故の現場に駆けつけるべしとの命令が。せめて結婚式の日ぐらいは休暇をとって、と訴えるアーニヤを振り切ってピョートルは命令に従って現場に急行したが、さてその結果は・・・？

#### <『希望の国』では「警戒区域」、さてこちらは・・・？>

3・11東日本大震災後の復興のための「立法」のあり方をフォローしてきた私は、『希望の国』の評論で、3月11日に福島第一原子力発電所の半径3km圏内に避難指示が出されてから、大震災から40日後の4月21日に原子力災害対策本部部長たる内閣総理大臣が、原発事故が起きた福島県や同県内の市町村に対して警戒区域を設定し、立入禁止と退去を命ずる「指示」を出し、この「指示」を受けて各市町村が福島第一原子力発電所から半径20km圏内を「警戒区域」として設定するとともに、緊急事態応急対策に従事する者以外の立入りを禁止するまでの、原子力災害対策特別措置法第15条第3項及び災害対策基本法第60条第1項にもとづく「避難指示」等の経緯を素描した。

このように、3・11東日本大震災の場合は、半径20km圏内を「警戒区域」として設定したが、チェルノブイリ原発事故の場合は、原子炉を石棺で覆い、プリピャチの住民に対しては全員強制退去を命じられたうえ、半径30km圏内を「立入制限区域」とすることに・・・。さて、「警戒区域」と「立入制限区域」との相違は・・・？

#### <それから10年後、アーニヤたちは？>

それから10年後。今アーニヤは母親と共にスラブティチという町で過ごしていたものの、ひと月の半分は故郷プリピャチで「チェルノブイリ・ツアーズ」のガイドとして働いていた。もちろん放射能は彼女の身体にも無縁ではないから、彼女の肌も艶がなくなり、髪の毛も少し抜け落ちていたが、彼女はなぜあえてプリピャチでの仕事を？驚くべきは5年間は持たないだろうと言われていたニコライをはじめとして、生まれた地を離れることを望まない一部の人たちが移住せずにプリピャチでの生活を続けていたこと。また、1986年4月26日のチェルノブイリ原発事故の時はまだ少年だったヴァレリーも今は成人して母親と共に暮らしていたが、あの日以来行方不明になっている父親アレクセイの死を未だに信じられないヴァレリーは、一人プリピャチの町の中へ・・・。

立入制限区域での撮影が大変だったことはプレスシートを読めば明らかだが、本作を観てさらにビックリしたのは、制限区域内の建物に内戦や貧困から逃れてきた難民たちが勝手に入り込んで生活していること。警戒区域設定の法的意味づけや、『希望の国』にみるその設定の奇妙さを指摘し続けている私としては、それと対比しながら本作における「立入制限区域」のあり方を注視したが、さてそこから見えてくるものとは？

#### <あなたは、どちらのタイトルが好き？>

日本では去る12月16日に実施された第46回衆議院議員総選挙において、原発とどのように向き合うか？原発の即時廃止は是か非か？等々の「原発政策」が争点の一つになった。しかし、結果は必ずしも原発廃止路線ではない自民党の圧勝。これをどう評価するかは非常に難しいが、本作を観てもミハル・ボガニル監督は声高に原発反対、原発の即時廃止という政治的主張のために本作を監督したのではないことは明らかだ。東日本大震災を見れば、福島第一原発事故に伴う被害の悲惨さがよくわかるし、本作を観ればチェルノブイリ原発事故に伴う被害の悲惨さがよくわかる。しかし、そうかといって映画はその被害をドキュメンタリーとして撮影し、残すことに価値があるわけではない。あくまでチェルノブイリ原発事故と立入制限区域の問題点をアーニヤをはじめアレクセイやヴァレリー、そしてニコライなど、プリピャチに住んでいた人々の目から捉えた本作は、それがフィクションだからこそ人々の胸の奥に響き、心を打つものがあるはずだ。

ちなみに、本作は2011年秋に東京国際映画祭に出品され、上映されたが、その時の邦題は『失われた大地』だったそうだ。しかし、今回公開されるについての邦題は『故郷よ』になっている。本作の登場人物たちの思いからみれば『故郷よ』の方がピッタリかもしれないが、チェルノブイリ原発事故とそこから生まれた人間たちの悲劇を真正面から考えれば、『失われた大地』の方がインパクトが強かったのかもしれない。さて、あなたはどちらのタイトルが好き？

2012（平

成24）年12月26日記